

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 12 日現在

機関番号：43922

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04796

研究課題名(和文) 幼児の即興的音楽表現能力を促進する指導法の開発

研究課題名(英文) A pedagogical approach to improving improvisational musical activity for children

研究代表者

高須 裕美 (Takasu, Hiromi)

名古屋短期大学・保育科・准教授

研究者番号：80413285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：音楽表現の頻度が高い子どもの養育者は、技術を意識せず、一緒に歌う時間の安心した環境と安定した感情を重要視していた。即興からはオフビートリズムが散見され、家庭で聴くマス・メディアの影響を強く受けていた。この結果から、伝統的な歌を再現したくなる教材として再検討することを提言した。次に、5歳児6歳児の子どもの即興的な歌を、言葉と旋律の音高に限定して分析した。それらの歌は、佳境になるとオノマトペを多用する、メロディを延長する、メロディの上昇が見られるという特徴があった。このような即興的な歌は、ノンバーバルな対話や旋律のような会話を取り入れた日常的な関わりにより、さらに頻度が増すことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、音楽づくりの基礎になるものとして活用されることが期待される。子どもの内在する感情を言葉にして表現する前段階として、即興的な作り歌やリズムによる遊びは、模倣する段階から自己表現へとつながるプロセスとして重要視されるべき分野である。子どもが遊びの中で豊かに表現活動を行なっていることを教育実践者が深く受容することは、楽曲を記譜通りに演奏する、いわゆる一斉保育の音楽表現活動のみならず、自由な遊びの中においても音楽に関わる創造性を発見する視点を広げる。また自己主体性に応える音やリズムを通じたやりとりを実践するアプローチ、保育者の感性を再考する知見として活用できる。

研究成果の概要(英文)：Children who frequently improvise songs have mothers who listen to them attentively and think that it is important to sing together, not to promote intellectual development or to hone musical skills, but for relaxation and emotional stability. I discuss how children create songs using off-beat rhythms and other musical qualities that appear to be strongly influenced by J-pop, anime, and other modern media that the children are exposed to at home. I examine the lyrical and melodic characteristics of songs improvised by 5-to-6-year-olds, showing how onomatopoeia, extended sounds, and rising pitches are defining characteristics of the songs. We need to pay attention to contemporary music trends and refine how we teach traditional folk songs to keep them fresh and interesting to the children of today and tomorrow. These interview responses will give us a clue as to how early childhood educators' involvement in musical activities at preschools can make children more musically expressive.

研究分野：幼児教育

キーワード：子どもの歌 即興的表現

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、主に保育分野で研究されている子どもの表現力の育成について、保育者養成の指導法に関わる知見と方法を活かし、様々な試行検討を行ってきた。研究開始当初は、保育者養成の学生が認識している必要な能力を、「制度」「感性」「技術」の3点について着目し、保育者の成長にとってどのような能力が必要であると認識しているのか調査した。「感性」は必要であると認識されているが、その力は一般的な芸術鑑賞より、自分の好む文化活動コミュニティの場で、他者と共同しながら見出せると述べる傾向があった。すなわち、保育を学ぶ学生にとっては、高等教育機関で「技術」を学ぶことを重んじる傾向があり、それだけでは保育者のバランスとしては欠けているのではないかという問題提起を報告した。(小柳, 小島, 高須, 2014)。また、指導計画の「ねらい」「使用楽器」「活動内容」から子どもの姿の認識調査を実施したところ、活動主体ものが多かったが、子どもの即興的な表現を引き出すような、音楽遊びとして展開しようと計画しているものが25%程度しかなかった(N=160)(太田・高須2014)。Takasu (2015) (The 8th APSMER 発表) では、保育者養成校の学生が授業計画し、実践したビデオ実践録画記録から、演奏技術の向上を目指した一斉指導よりも、むしろ保育者の演じる力、一緒に楽しむ表現力、参加を導くような声掛けの方が、子ども自身の表現に対する興味の度合いが促進できるのではないかということを示唆した。つまり、保育者養成における即興的な音楽活動における指導法の実践分析から、日本の保育における表現力を育成する音楽的な活動については、技術や能力の萌芽を育成するというを目的にするだけではなく、日常的な保育も視野に入れ、5領域の観点から目的を幅広く設定すべきであるという結論に至った。この具体的な取り組み方においては、子どもの人格や表現に対する興味関心を育てる活動内容を展開するために、高等教育機関において、どのような教育法が求められるのかという課題を持った。

これまでの研究者は、日常的な子どもの即興的な遊びの様相から、子どもの文化的嗜好と即興的な音楽表現の関連性を指摘している。小泉(1969)らが行った、東京の子供のわらべ歌の調査では、いわゆる西洋の音階が普及していた1960年代においても、2音の話し言葉のようなフレーズが残っていることを検証している。Marsh(2008)は、移り変わりの激しい音楽文化を踏まえ、集団の遊びの中で展開する音楽的な対話に注目し、音楽の西洋化が進んだ現代社会においても、その国の旋律やリズムが子供の作り歌に残っているということを示した。しかし、実際に子どもの即興的な作り歌の頻度についての言及はあるものの、即興的な歌を頻繁に歌う子どもの音環境や、影響を受けている歌、養育者の保育観について分析されていない。したがって、頻繁に音楽表現を繰り返す子どもの音環境や育ちの環境を考察することによって、養育者や教育実践者の集団保育における保育観、指導法や音の関わりについて、質的に検討する余地がある。

本研究は、子どもの即興的な音楽活動を促進するための指導法の基礎的な研究開発を目的としてスタートすることとした。その際に、「即興的な歌作り」に着目し、自由な保育時間や家庭における音楽活動から手掛かりを見出す。子どもの即興的な音楽活動は、一斉活動ではなくリラックスした時間に散見されることから、家庭での音楽活動の調査し、保育実践においても安心できる環境作りと、そのような音楽行為を引き出すような関わりについての検討を行った。

## 2. 研究の目的

幼児の即興的な音楽表現とそれに影響を及ぼす音楽的な環境に着目する。子どもの音楽的な嗜好は、保育施設や学校だけでなく家庭での音楽環境に大きく影響を受ける。(e.g. Lum & Whiteman, 2012)。本研究では、子どもの即興的な作り歌から音声分析と対象児を取り巻く音楽環境や親の保育観について調査することを手掛かりに、日常的な関わり方について、音楽表現能力を促進するための指導法を考えるため、以下の5つの研究を行う。それぞれの目的を以下に示す。

- 1) 文献研究において、音楽行動の意味や時代変化による子どもの音楽行動の課題、主に海外の文献からも知見を整理し、子どもにとって自然な音楽行動とはどのような行動を指すのか、どのようなレパートリーの歌を歌っているのか、Marsh(2008)やManes(2012)を先行研究として最新の動向を検討し、それと同時にどのように身体表現をしているのかについて明らかにする。
- 2) 子どもの即興的な音楽表現の実態調査、音楽環境の観察調査を実施する。子ども達は何に影響を受けて音楽行動を発信しているのかについては、国によって現状が異なる(Douglas, 2010)。両親、保育者の役割、マス・メディアの役割、何が子どもを「歌いたい」と思う気持ちにさせるのか、また何に刺激を受けて音楽行動を起こしているのか日本の現状を調査する。
- 3) 子どもの音楽行動に関するインタビュー内容と長期観察報告、即興的な作り歌における日本の子どもの音楽行動をクリップでまとめ、幼児教育・音楽教育の国際学会にて、口頭発表とポスターにて発表する。また、国際学会誌への論文も投稿する。
- 4) 国内外における複数の研究結果を本研究と関連づけながら、研究を推進する。国際的に活躍する音楽教育者の発言や論文投稿などをリサーチし、さらに追加資料を収集すべく幼児の活発な音楽的表現を促進させるための具体的な試案を構築する。
- 5) 研究4で考案した即興表現指導法の有効性を検証する。音楽経験、音楽行動の尺度が類似した何人かの子どもを対象とし、即興表現指導法の有効性について検討する。指導法を受けたケースと受けなかったケースの自己表現を比較することにより、実証的に明らかにする。内容そのものについては、実践の音声を記録し、そこでの幼児の行動・音声についても検討す

る。これは自分の言葉で表現を説明することができる5歳児および6歳児を対象とする。

### 3. 研究の方法

- 1) 自分自身の自己表現の行動が、実際に学ぶ音楽にどの程度関わっているのか、音楽を作る時の声はどのように表現しているのか。音楽行動の意味や時代変化による子どもの音楽行動の課題における先行研究(Roberts, 2013) (Marsh, 2009, 2014)も加え、文献から整理していく。
- 2) 養育者、保育者の役割、テレビやコンピュータの役割は何なのかを子どもへのインタビューから明らかにしていく。対象児は、自分の気持ちがある程度話することができる5歳から6歳に限定する。何が子どもを「歌いたい」と思う気持ちにさせるのか、何に刺激を受けて音楽行動を起こしているのか、日本の現状をできる限り現場で調査する。
- 3) 子どもの音楽行動に対する保護者、保育者の意見をインタビューし、その実態を明らかにする。アメリカなどの諸外国との比較調査も行う。日本オルフ音楽教育研究会「オルフ・シュールヴェルクの研究と実際」朝日出版社(2015)や「音と動きの研究」(2016)を参考に、子どもの自由な時間の音声録音から、作り歌の部分をクリップでまとめ、それをメロディとリズム、速度の項目に分けて分析する。
- 4) 保育者や教師と共に対話的な音楽的関わりについて考案する。主な検討事項は以下の通りである。即興表現実践曲の選定 (Campbell,2007)、指導形態(集団や個人、自由時間の活用など)、実施期間、保育者の役割(自己表現の展開に結びつける声掛け)などである。
- 5) 実践者には、どのような経緯で検討した即興表現指導法なのかという点について詳細に示す。そして、研究4で考案した即興表現指導法の有効性を検証する。音楽経験、音楽行動の尺度が類似した何人かの子どもを対象とし、即興表現指導法の有効性について検討する。指導法を受けたケースと受けなかったケースの自己表現を比較することにより、実証的に明らかにする。

### 4. 研究成果

- 1) 文化環境の違う国であっても「身体表現」と「歌」が繋がった遊び、「言語」と「歌」がリンクした遊びが残存していることや、子ども達が音楽として認識しているものは、必ずしも音が出るものだけではないということを結果としてまとめた。また、日本の子どもの調査については、マス・メディアによる音楽に大きく影響を受けているであろうと仮説を立てたがManes (2009)「調査園での半数近くの子供から、遊び歌としてわらべ歌の旋律が取り入れられている」という結果が報告されていた。したがって、子どもへのインタビューを通して調査を行い、日本の子どもの遊びや音楽的嗜好について60年代からの変容を文献から明らかにした。
- 2) 自分自身の自己表現をどのように説明できるのか、歌を歌う行動がどれほど音楽の嗜好と関わっているのか、音楽を作る時の声はどのように表現しているのかという項目において観察した。歌う活動の中でも自作の歌で表現することを楽しむ傾向を持つ子どもは、その自己表現を具体的に言葉で説明できる語彙力を持つことを保育者のインタビューから報告した。就学前施設で学ぶ歌は、皆で歌う歌、そして自宅では自作の歌や家庭環境の中で聴こえてくる歌を楽しむ。そして、それを集団の場である就学前施設や学校で友達に聞いてもらったり、一緒に歌ったりして共有することを繰り返しながら「いつも歌は歌っている」という言葉で、日常的に歌で表現していることを把握した。以上の作業は、子どもの自発的な表現を引き出す有用性を検討する上で基礎となるものである。
- 3) 研究2の結果から5歳児と6歳児へのインタビューと保護者に対しても実施した。このインタビューは、日米2カ国において行なった。研究2でまとめた子どものインタビューと即興表現の様相に以下の提言を行なった。即興的な表現の頻度の高い子どもの保護者や保育者は、子どもの即興的な能力を特別に教えている事項はなかった。しかしながら、①子どもの表現活動に介入したり、具体的に詳細を問うたりすることをしない。②子どものつぶやきや、即興的な音楽表現活動を前向きに受容している。③音楽は子どもの人格を育てるための一部の要素であると述べ、音楽的な技能を育てるための習い事や技術の習得ではない。④子育てを長期的なスパンで見守っている保育観を持つこと。④音楽的な問いかけを行なっているわけではなく、子どもの発信する対話的な音の関わりに応えるような態度を繰り返し、そのような関わりを大切に考えている。つまり、子供が歌を変化させながら歌うことを「遊び」と捉え、遊びの質の高まりを保障するため、素材として歌を提供し、子供同士や集団の育ち合いの中で、歌い合う場を子供が選択し、替え歌や作り歌などの活動で情報を交換したり更新したりするような「遊びの環境」に着目する必要があることを明らかにした。
- 4) 個人を対象にした日常的な保育における関わりによって発展した対話フレーズをクリップにして報告した。保育者にノンバーバルなコミュニケーションを子どもの保育時間に積極的に取り入れてもらい、子どもの即興的なつぶやき歌の変化を3ヶ月おきに1日ずつ録音した。メロディ・リズム・繰り返し・交互唱・バリエーション・パロディ(替え歌)の6つの領域で分けたところ、子ども達の子つぶやき歌には、パロディとバリエーションが増えていることを明らかにした。つまり、ノンバーバルなコミュニケーションが子どもの声や音楽的な

- 表現力を動機づけさせ、即興的な言葉に変化し、次第に抑揚が出始める可能性を示唆した。
- 5) 世界各国の音楽教育における即興的な表現についての指導法について、ノルウェーの研究グループと共に共同研究を実施し、国を超えて実践することが可能な方法論の提示とその実践を冊子にまとめた。担当執筆部分では、アジア地域の即興表現に関する著者として、研究3)を根拠にした子どもの音楽的嗜好と、即興的な歌から考察した速度感のある音楽、リズムの頻度から現代のマスメディアに影響を受けていること、メロディの高低感から、感情表現を強調する時にはロングトーンや音の上行傾向があること、言葉の羅列においては速度感のあるリズムで表現されていることなどの特徴を事例から考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Hiromi Takasu	4. 巻 1
2. 論文標題 From Japan to Jersey City: Five and six-year old children's voices on the appealing nature of musicking in two different cultural contexts	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Asia Pacific Symposium of Music Education of Research, Conference Proceeding	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 高須 裕美	4. 巻 56
2. 論文標題 子どもの家庭における歌唱行動 5 - 7 歳児の保護者へのインタビューからー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高須 裕美	4. 巻 55
2. 論文標題 子どもの音楽行動を考察するー音楽の魅力を語る 5 歳児たちー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 名古屋短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 67 ~ 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件/うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Campbell Patricia Shehan, 岩井 智宏, 高須 裕美, 佐藤 昌弘, 今田 匡彦, 田中 多佳子, 坪能 由紀子
2. 発表標題 学校と社会を結ぶ音楽教育(3)さまざまな文化にもとづいた音楽活動を教室に! (第50回大会報告)
3. 学会等名 音楽教育学会
4. 発表年 2019年 ~ 2020年

1. 発表者名 Hiromi Takasu
2. 発表標題 An Investigation of 5 - 6Year Olds' Musical Activities at Home
3. 学会等名 International Society for Music Education ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年 ~ 2019年

1. 発表者名 Hiromi Takasu
2. 発表標題 Discovering Children's Musical Interests Through a Call-and-Response Singing Repertoire
3. 学会等名 International Conference on Music Perception and Cognition ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年 ~ 2019年

1. 発表者名 Hiromi Takasu
2. 発表標題 Improvisation of Children through Call and Response Music Activities
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年 ~ 2019年

1. 発表者名 Hiromi Takasu
2. 発表標題 Encouraging Musical Improvisation in Early Childhood-Developing a Musical Repertoire-
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association ( 国際学会 )
4. 発表年 2017年 ~ 2018年

1. 発表者名 Hiromi Takasu, Saan Manes
2. 発表標題 From Japan to Jersey City: Five and six-year old children's voices on the appealing nature of musicking in two different cultural contexts
3. 学会等名 Asia Pacific Symposium of Music Education of Research (国際学会)
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 Hiromi Takasu
2. 発表標題 An Investigation of 5-6 Year Olds' Musical Activities at Home
3. 学会等名 International Symposium on Performance Science (国際学会)
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 高須 裕美
2. 発表標題 家庭における音楽行動についての調査 - 5-6歳児の子どもの歌唱に着目する -
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 Hiromi Takasu
2. 発表標題 Encouraging Musical Improvisation in Early Childhood -Developing a Musical Repertoire-
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association(PECERA) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Hiromi Takasu
2. 発表標題 A Study of Improvisational Music Activities for Japanese Children
3. 学会等名 32th ISME World Conference on Music Education, Commission Seminar (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Hiromi Takasu
2. 発表標題 A Study of Four-Year-Olds' Rhythmic Comprehension and Activities
3. 学会等名 32th ISME World Conference on Music Education (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Guro Gravem Johansen, Kari Holdhus, Christina Larsson and Una MacGlone	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 273
3. 書名 EXPANDING THE SPACE FOR IMPROVISATION PEDAGOGY IN MUSIC -A Transdisciplinary Approach-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----